

藤岡作太郎

夏目君について

夏目君について

○夏目君の作物は、その出た当時読んだだけで、まだ纏めて精読したことがないのだから、全体の評論を下すことはむつかしいのですが、当時いちばん面白いと思ひ、今でもいちばん面白いように思ひのは「草枕」です。「草枕」を小説と見れば、出てくる人物は、どの人物もどの人物も同じようなものでかつ別に纏まった趣向もないよ
うだが、ただ読んでいると春ののどかな、やさしい、温かな、夢のような感じ——一種の春の匂いに身を襲われ

るような気がする。その気分がいちばん面白く思ったんであります。そのほかの「草枕」の価値または面白味については十分言っている人もあるようですが、それ以外に私の面白いと思ったのは沖澹の趣味ということを大雅堂などの絵にして論じたところ、あすこがたいへんに面白かったんです。あのところを見ても夏目君の美術眼の勝れたことが分かるのです。これが贗作か真作かなどという鑑識のことは別として美術そのものを鑑賞することは多くの批評家または作家などに一頭地を抜いていると感心した。従来大雅堂の絵などをただ飄逸だとか、奇抜

だとかいってホンに簡単な、漠然とした感じの二三句で評し去ったばかりで、委しい説明を加えて論じたものはない。この絵は面白いとはいうけれども自分で考えてみてどこが面白いかと追及してみれば分ならず、他人に付和雷同して旨いとはいうけれども、追求すればこれもどこが旨いのか分からないという有様であつた。ところが夏目君がそれを説明して、なるほど文人画の面白味はここにあると、いうことを詳しく説明し得たのは、他の批評家が聞いても、従来自分のいい得なかつたものをいい得たと首肯うなずくだろうと思う。その辺は私の感服に堪えなかつた。

ったところでもあります。

○「虞美人草」を読んでも、非常に面白いと感じたところも多いしまた多少遺憾に思ったこともあるが、とにかく全体をいえば、この「虞美人草」は人間を写すというよりも、どうしても観念を人格化したように感じられて、すべての出ている人間が一本調子のシンプルな人間ばかりで、複雑な性格を具えたものは見えず、こんな人間が今の世界にあるかしらんというような感じがする。がその結末の大破綻などはよほど思い切って書いてあって、近ごろあれだけ大きな破裂を写したものはあまり見ない

ので、極めて痛快に感じた。が、しかし痛快に感じてい
るうちにも悲壮または莊嚴というところを少しく欠いて
いるように思う。これはいつもの夏目君一流の調子がつ
いて回って、熱烈にもものを見るということをやらないの
か、または実在から退いてもものを風刺的に見るというの
か、なにしろ悲壮、莊嚴の分子が多少足りないような感
じがするのです。しかしながら長短ともに存していると
はいうものの夏目君の特色を發揮して、近ごろ類を見な
い小説と思う。ことにこれを見て思い出されるのは、江
戸時代の曲亭馬琴である。馬琴に比したら夏目君自身は

あるいは不平かもしれないが、その観念を人格化するという点、それから自分だけはきわめて健全な作物を作つて世の中の賸々者流とは脈を異にして、ひとり超然として立っているような点はすこぶる馬琴に似ていることであろうと思う。時代が違ふからしてむろんその人も違ふ。文化文政時代が明治に進んだごとくに、その文化文政時代の馬琴が明治の夏目君に進んだであろう。時代の間、相違は大なるものであるが、その相違を借いてもなお相通うている点が多いように思う。

○私は夏目君の作物を熱心に読んで一人である。そ

の豊富なる学識を持っていつもいつも、回は回ごと(し)かし今度の「坑夫」のごときはいっこう感服しないが)人目を新たにせんと勉めておられるのは優に当代第一の作家として推重するに足ることと思う。(談話筆記)

(明治四十一年三月、「中央公論」)

日本文学電子図書館

夏目君について

著 者 藤岡作太郎

制作者 宮澤一郎

底 本 「漱石全集 別巻」角川書店
昭和42年10月10日5版発行

日本文学電子図書館